

愛知大学人文社会学研究所 『文學論叢』 第一六〇輯 抜刷 令和五（二〇二三）年三月二十日発行

## 市民社会の結社としてのクラブ・組合の過去と現在

——ドイツ語圏のフェルアイン（アソシエーション）に探る——

河野 眞

## 市民社会の結社としてのクラブ・組合の過去と現在

——ドイツ語圏のフェルアイン（アソシエーション）に探る——

河 野 眞

（目 次）

〔一〕 アソシエーションをめぐる日本の論議から

『結社の世界史』とアソシエーション

（シュルツとローウイへのコメント）

『結社の世界史』の基本的視点への感想

人類学と歴史学

（特定の団体がたどった個別の歴史）

（日常とクラブ・組合）

（アソシエーションから見た日本の結社の変遷）

（現代日本と結社）

〔二〕 クラブ・組合の社会的機能

（ドイツ語圏のクラブ・組合）

媒介システムとしてのクラブ・組合

〔三〕 歌唱クラブと歴史の一齣

統合機能とアイデンティティ機能

ラルフ・ツオルによる地域のパワー・ストラクチャー批判

マックス・ウェーバーが事例に挙げた歌唱クラブ

ハンス・シュタウディングアの音楽結社の研究から

（ツェルター「リーダーターフェル」の成立）

（ネーゲリの歌唱改革）

（ロマン主義と国民歌謡）

村の歌唱クラブ — ケーレハーツインガーの研究から

本稿の帰結

〔注〕

〔参考文献〕

市民社会の結社としてのクラブ・組合の過去と現在

西洋の集団形成を日本との比較をも視野におきながら検討するにあたって、本誌では一般にアソシエーションと呼ばれる形態を中心に取り上げてきた（河野二〇一五、二〇一八、二〇一九、二〇二一、二〇二二）。ドイツ語ではフェルアインである。なお筆者は、これにクラブ・組合、また略して組合の訳語をあてている。前回ではドイツの歴史学者が『フェルアインの時代』と呼んだ十九世紀初めから世紀半ば過ぎ頃までの最初の興隆期を取り上げ、また前回はドイツ女性史との重なりを問うた。今回は、結社に焦点を合せて世界の歴史を読み直そうとする本邦の論壇の動向に注目することからはじめる。次いでフェルアインをめぐるドイツ語圏諸分野の議論の検討にすすみ、さらにそれとの関連で歴史の一齣を取り上げる。これを通じて、西洋の集団形成について理解が深まることに多少とも役立てばと願っている。

## 〔二〕 アソシエーションをめぐる日本の論議から

集団形成に焦点をあてて歴史を見直す試みは、おそらく正面からそれを課題とした例はあまり多くはないだろう。それだけにその種の事例に注目すると、さまざまな問題が見えてくる。もとよりそのすべてを論じる用意はないが、多少感じたところを綴ろうと思う。

## 『結社の世界史』とアソシエーション

二〇〇〇年のことだが、歴史学の分野で知られる出版社から新しい視点による世界史の試みとして五巻のシリーズが刊行された。『結社の世界史』である。全体の企画は綾部恒雄が監修者、また各巻はその方面に堪能な学究がまとめ役である。（一）日本『結衆・結社の日本史』（編者・福田アジオ）、（二）『結社が描く中国近現代』（編者・野口鐵郎）、（三）『アソシアシオンで読み解くフランス史』（編者・福井憲彦）、（四）『結社のイギリス史 クラブから帝国まで』（編者・川北稔）、（五）『クラブが創った国アメリカ』（編者・綾部恒雄）。筆者がこのシリーズを知ったのは刊行からしばらくしてからであったが、刺激を受けると共に奇異な思いにも見舞われた。と言うのは、ドイツが欠けているからである。これを言うのは、自分がドイツ関係に携わっているからだけではない。常識的に見ても、ドイツはアソシエーション、すなわち集団としての人間のあり方が重みをもってきたからである。なお先にふれたように、ドイツ語ではアソシエーションを指す語はフェルアイン（Verein）で、これが社団・クラブ・組合・協会などを指している。それが社会的にも文化的にも大きな比重を占め、さらに日常の暮らしとも切っても切れないことは、ドイツ人の自己理解にもなっている。たとえばドイツ大使館が各国に配布している自国の案内にもアソシエーションの国と訳すことができる表現 Vereinsland が入っている。またドイツ人が自分

たちの国民性を語る場合、フェルアインは決まって取り上げられる項目である。その分野の幾つかの理論についてはここでも取り上げる。

### (シュルツとローウィへのコメント)

綾部恒雄によると、結社に光を当てた歴史の見直しは、ドイツのハインリッヒ・シュルツ（一八六三—一九〇三）の『年齢階梯と男子結社』<sup>①</sup>を大学院生の時に読んだことに遡ると言う。このシュルツの名著は人類学や民族学の分野では古典的なもので、世界各地の社会集団を（多くの場合は）プリミティヴな次元でとらえ、少年や青年が組をつくる現象を追っている。特に若者組が『男の家』という共同生活を営むことをアフリカやアジアや太平洋の島々の諸民族、またヨーロッパでも主に村の慣習において探求した。『社会の基本形式について』というサブタイトルからもうかがえるが、年齢階梯による集団形成、とりわけ少年・青年の男子結社が太古から社会形成に本質的な役割を果たしてきたとの見解である。そうした男子結社はしばしば『秘密結社』であり、祖霊や自然霊との交流が比重を占め、それはまた豊穰観念ともつながっていたとして、シュルツは思念・儀礼・具物を追跡した。

なお、学史ないしは思想史の流れから見ると、シュルツの理論の背景の一つは、その半世紀近く前に現れたヨーハン・ヤコブ・バツハオーフェン（一八一五—一八七）の『母権論——古代世界の女性

支配に関する研究』（一八六二）<sup>②</sup>の影響力が強まったことで、それへの疑義と反論という面があった。シュルツが男女の基本的区分についてはじめに長い一章を設け、特に世界各地の（当時の言い方では）『自然民族』における性差の事例によって裏付けているのは、それに関係する。もともと、歴史、少なくとも表立った歴史は、意識するとしなないと拘わらず）概ね男性を中心に記述されてきたため、事新しいことでもないが、シュルツの場合は、社会の基本を男性の盟約的結束にもとめたのが独自でもあり、またそれは時代風潮にも適った。と言うのは、その考え方は、次の約半世紀には人類学と民俗学の分野における影響力の大きい潮流となったからである。ここでは男性結社こそがヘーゲルの意味での国家形成に至る基盤であったという見解にまで引き伸ばされ、アカデミズムから通俗人類学や通俗民俗学まで多くの論客が登場した。いわゆるウィーン学派の中でも勢力を得た論調である。そこで強調された要素や脈絡のほとんどは、すでにシュルツの著作に表れていたのである。が、今は学史には踏み込まない。<sup>③</sup>

一般的に言えば、きっかけは必ずしもその後を持ち越されるわけではないが、綾部の場合は、影響はもう少し強かったようである。と言うのは、その次に研究の指針となったのはロバート・ローウィの『社会組織』であったとして、それを手引きにアメリカでフィールドワークを手掛けるようになったと記しているからである。なお

言い添えれば、ローウイが重視した先行研究者としては、クライド・クラックホーン、ラルフ・リントン、プロニスワフ・マリノフスキー、クロード・レヴィ・ストロース等と並んで、一世代前のドイツのハインリッヒ・シュルツとヴェイルヘルム・シュミットがよく言及される。後者は南山大学で教えたことがあり、また文化人類学の分野でドイツ語圏と日本との懸け橋になった人物でもある。このシュルツにもシュミットにも、また二人を先行研究者と見たローウイにも顕著に見られるのは人類学に独特の思考である。任意の（とまでは言えないが、それがよく表れた）一節を挙げよう（ローウイ一九四八、一一）。

自発的なアソシエーションを、独自かつ広範に分布する文化的現象として取り上げた最初のエスノローグはシュルツであった。むろん、文明諸国では、無数と言ってよいほどの宗教的な兄弟団やソーシヤル・クラブやギルドその他が存在する。しかしシュルツ以前には、その初期の段階に着目して、プリミティヴな並行事例が頻繁であり重要でもあることを論じた人はいなかった。

自発的なファクターには、他種のモチーフが強く混じっていることもあるかも知れない。しかしシュルツはそれを適切に認識しなかったように思われる。シュルツが常に強調したのは、

男性を結び合わせる普遍的な関心・共感・嗜好であった。そのさい、男性は、人間という種における（彼の言うところでは）非社会的な半数である女性とはコントラストを呈する。……

ローウイの論説の特徴は、よくも悪しくも人類学的であることにある。すなわち、諸現象を成り立たせている普遍的なモチーフの特定である。人間に普遍的であるために、モチーフはいつでも発現してもおかしくない。参考として他の任意の箇所での具体例を見るなら、東アフリカのトンガ族、ハワイの先住民、タヒチ島の先住民が、最初に実った穀物ないしは果実を特別な装いで祀ることに注目し、それは明治維新以前のミカドの執り行う儀礼と同じであると論じたくだりがある（同、三三四）。新嘗祭を指すのであろうが、ここで言及される地名の間には交通においても文化的な系譜においても直接的で有機的な相互関係はあり得ない。それにも拘わらず、その論説が有意であるとすれば、モチーフが普遍的という点にある。こういう理解の仕方は人類学や民族心理学に特有のものだが、見方を変えると、そこに歴史的な視点は本質的に抜けている。普遍的とは歴史的の意味でもある。

綾部の論説がシュルツやローウイとまったく同じであるかどうかはともかく、それらと別の立ち位置が主張されるわけではない。『結社の世界史』では、『ほぼ近世以降の日本・中国・フランス・イギ

リス・アメリカという五カ国のおもだった結社を取り上げた」として時代の大まかな限定がなされているが、なぜ近世以降なのか、という説明は概説的な記述でも個々の箇所でもほとんど聞くことができない。基本的には、『新石器時代』あるいは原始農耕の出現と相前後してあらわれた『一定の「約束」のもとにつくられる集団』としての『利益集団ないしは結社 (association)』、それと基本的に同じ性格をもつ人間の結集は近世から近現代にも幾らもみられるという理解である。また綾部自身が説くように、身近で誰もが知る近代の人間の結集のあり方も『一般の予想よりかなり古い歴史をもっている』として、人類史において地縁と血縁とほぼ並んで現れていた要素に注目を促したということでもあるのだろう。

### 『結社の世界史』の基本的視点への感想

『結社の世界史』の構想そのものについても幾らか検討を加えようと思う。先ず五巻シリーズのいずれにも『監修・編』者である綾部恒雄の「刊行にあたって」が巻頭に置かれている。それによると、血縁と地縁という『二大紐帯原理』に対して、それに『劣らず古くから存在する紐帯原理は、共通の利害や関心に基づく「約束」の原理であった』として、さらに次のように説明と定義が行なわれる。

このような一定の「約束」のもとにつくられる集団は、利益

集団ないしは結社 (association) と呼ばれた。結社は人類史上新石器時代、あるいは原始農耕の出現と相前後してあらわれたものといわれており、一般の予想よりかなり古い歴史をもっている。結社は血縁集団や地縁集団とは異なり、紐帯の原理が「約束」であるから、これを約縁集団と呼ぶことができよう。ここでは、こうした約縁集団すなわち結社を、次のように定義しておきたい。

なんらかの共通の目的・関心を満たすために、一定の約束のもとに、基本的には平等な資格で、自発的に加入した成員によって運営される、生計を目的とはしない私的な集団。

「平等な資格で」ということは、加入の条件として必ずしも家族（血縁）や出身地（地縁）を問わない、ということの意味し、自発的な「個」を重視する近代思想の萌芽的要素を内包していた。事実、近世以降の都市社会においては、数知れぬアソシエーションのネットワークが世界史の変動の底流をかたちづくってきたとみなすことができる。血縁や地縁集団から離れ、都市社会をかたちづくる「個」となった人間は、自己実現のためにいくつもの組織体への帰属をよぎなくされる。クラブ・協会・講・組合・サロン・党・サークル・団・アソシエーション・会・ソサエティなどとさまざまに表現される結社は、そのなかで、自己と関心や利害を同じくした同志とともに、自己の目的を実現

しようとする集団であり、個人が生きていくうえでもっとも重要なアイデンティティの拠点となっていた。

本シリーズでは、ほぼ近世以降の日本・中国・フランス・イギリス・アメリカという五カ国のおもだった結社を取り上げた……

大局を押さえたまとめ方で、いずれの巻も多数の個別論文の集合にも拘わらず、緊密で充実した内容となったのは、この明快な指針が大きく与ったと思われる。しかし同時に、疑問も起きる。そこに響く主調音は人類学的な関心なのである。

### 人類学と歴史学

かく、監修者の構想にはアソシエーションを歴史的現象として把握する視点が希薄であるが、シリーズ五巻の実際の中身は具体的な団体の記述であるため、団体それぞれの歴史的経緯の説明で占められている。また各巻とも、二〇から二五の個別の団体ないしは団体の母体となる社会集団を取り上げている。したがって、事件や世相や関係する人物の記述という水準では特定の歴史的状況の復元や要約がおこなわれている。

### 〔特定の団体がたどった個別の歴史〕

監修者が編者でもある『クラブが創った国アメリカ』では二五団体（団体結成に向かう特定の社会集団を含む）が五つの歴史区分に配置される。歴史区分は、「植民地期・独立革命期の結社」、「西部開拓期・南北戦争期の結社」、「第一次世界大戦・大恐慌期の結社」、「第二次世界大戦・冷戦期の結社」、「現代アメリカ結社の底流」という部建てである。また論説として監修者が自ら執筆したものを挙げる、「世界最大の秘密結社 フリーメイソン」と「ユダヤ人の組織力」がある。「フリーメイソン」の節では、一八世紀初めのイギリスで設立された団体がアメリカにも活動の場を広げたこと、またその発展に関わった多くの歴史上の人物が挙げられる。アメリカ建国期のベンジャミン・フランクリン、自動車王ヘンリー・フォード、さらに第二次世界大戦後の日本占領軍の最高司令官ダグラス・マッカーサーなど、歴史上著名な人物は数十人が及ぶ。したがって、個別の話題は当然ながら歴史の流れに沿っている。個別のアソシエーションの設立や発展についても、特定の歴史的状況との関わりで記述される。しかし、アソシエーションという結集形態の歴史的構造については聞くことができない。千差万別の個別団体としてのアソシエーションを貫く特質として説かれるのは人類学的特質ではあっても、歴史学的特質ではない。

しかし各巻の編者は、この問題に留意したように思われる。たとえば(三)『アソシエーションで読み解くフランス史』(編者・福井憲彦)は、フランスにおける一九〇一年の「結社法」の説明から始まり(「序章」三一―一)、法律は、すでに長期にわたって結社が設立され活動を続けてきた現実を《後追いつるかたちで法認したともいえる》とされる。またアソシエーションへの注目と評価ではアレクシ・ド・トクヴィルのアメリカ論(第二巻、一八四〇年)の数節が実質的に起点になったことも、シリーズの数か所で言及される。

したがって個々の話題では歴史的経緯が描かれる。しかし、歴史研究がその強みを大きく発揮したかとなると、やや疑問である。たしかに、歴史に消長した多種多様な結社がほぼ時間の流れに沿って配列され、取り上げられた個別の団体についてはその団体史が記述される。それゆえ歴史を動かした結社にはどんなものがあつたかについては手際よく情報があたえられる。しかしアソシエーション研究としてそれが適切かどうかとなると、やはり問題が残る。歴史を動かしたアソシエーションにはどんなものがあつたかという問いと、アソシエーションとは何かという問いは重ならないところがある。これを言うのは、アソシエーションは日常の仕組みという側面をもみせるからである。もとより、歴史を動かすことと日常とは常に別物であるわけではない。アソシエーションは何らかの新しい活動を起こすために同志があつまって設立されるものであるため、社

会的な動きとなることが志向される。その点では、社会の動因、延いては歴史の動因となる可能性をはらんでいる。たとえば一般には知られていない新しいスポーツ種目を普及させようとするささやかな団体が、状況と歯車がかみ合って一大ブームを巻き起こすこともある。しかしそれはやはり稀であろう。むしろ日常の隙間をうずめることを目的としているアソシエーションもある。さらに趣味やホビーの会もある。早く夏目漱石が『文學評論』(一九〇九年)において、イギリス人の習性として《何でもかんでも俱樂部組織にした様に見える》と注目した種類もそうである。<sup>(4)</sup>

其証拠には俱樂部の中には随分妙な目的を有したのがある。「貴婦人抱犬俱樂部」(Lady's lapdog Club)など言う、名前からして奇妙なのがある。是は所謂通人とか言う連中が毎日午後集合して各自の服装を比較し、新流行を考え出してはやらせるための俱樂部であつたさうだ。それから「花卉俱樂部」と言ふのがあつて、これは石竹や鬱金香の愛玩者の会で、雛菊の色変わりを三時間も見詰めて居たり、十里も歩いて行つて花卉の筋一本を珍らしがる様な連中から成立して居た。それからもつとも名前の振つたのは「ビフテキ莊嚴会」(Sublime Society of Beef Steaks)に、「悪魔会」(Pandemonium Club)などであらう。



『ジキル博士とハイド氏』で知られるステイヴンソンに「自殺クラブ」(The Suicide Club. 一八七八年)があることを付け加えてもよいくらいである。

### (日常とクラブ・組合)

先にドイツの大使館が配布する自国の案内に《フェルアインの国》、すなわちクラブ・組合の国という 키워ードがみられることを挙げた。それは、(むろんめざましい活動のアソシエーションもあるが)、それと並行して、次のようなありふれた現実が広がっていることを指している(パウジンガー二〇〇〇「河野・訳」)。

村の文化はフェルアイン文化でもある。公的な文化施設が平等を重んじ地方分散的な構造であるにもかかわらず、一般的には、シンフォニーを演奏する大きなオーケストラも大きな演劇も村にはやってこない。文化生活は《手作り》であり、地元民によって担われる。それに形をあたえるのは、何よりも種々のフェルアインである。地域の祭り行事となれば、そうしたフェルアインが連携して、祭りの夕べや上演すべき演目や行列やお楽しみ品の物などを盛り込んだプログラムを作成する。あるいはそれぞれのフェルアインがプログラムを組むこともある。音楽の演奏、アマチュア劇団の芝居、夕べの催し、クリスマスの

祭りなどである。それは村だけでなく、小さな都市でもあまり変わらない。小都市でも、文化的な行事の重要部分が種々のフェルアインによって担当される。それに対して大都市では、フェルアインの動静は、プロフェッショナルな劇場やオーケストラや博物館や画廊など活動の影に隠れてしまう。しかしそこでも、フェルアイン活動の厚いネットワークは、中位や下位の層の人々には、《もつともらしい》文化よりも大きな意味をもちつづけている。

地方都市の文化活動の担い手としてのフェルアイン(＝クラブ・組合)である。この種の現象は他にも幾らも見ることができる。たとえば、小都市や村の博物館や資料館はボランティア団体の活動がなければ成り立たない。伝統的な祭りの維持でもそれは同じである。日本式に言えば祭礼の奉賛会で、昔は教会を中心とした宗教的な団体になっていたが、今日では宗教性が失われたわけではないが、フェルアインという結集形態による団体であることが非常に多い。特に教会堂の外で繰り広げられる催しを伴う祭礼は、準備の間も人手もかかるだけにフェルアインの存在は必須である。また教会堂の祭礼ではないが、日本でも知られているめざましい祭りのないしはイベントを挙げるなら、カーニバルの運営がそうである。ケルン、マインツ、ミュンヒェンといった大都市のカーニバルだけで

なく、小都市でも毎年イベントのプログラムが生まれ、パンフレットが作成され、多彩なアトラクションが企画される。それはクリスマス・マーケットの運営などでも同じである。

こういう側面を一口に言えば「日常的な営為をなしたたせている機構や仕組みとしてのアソシエーションということになるだろう。これは学問分野にあてはめると、たしかに歴史学の対象ではあるが、それと同じくらい社会学や民俗学の対象ということにもなる。さらに、政治学や行政学の関係者によっても注目されてきた。

### (アソシエーションから見た日本の結社の変遷)

そうした日常的な観点から改めて『結社の世界史』を見ると、どの巻にも日常性の強い結社を取り上げた数節が入っていることに気づかされる。中でも興味をそそるのは、日本をあつかった巻である。今、その(一)『結衆・結社の日本史』(編者・福田アジオ)で見ると、特に「近世の人間関係と社会結合」の部建てはどれもそうした性格を示している。「組合と仲間」、「若者組と娘仲間」、「講と日待」、「寺子屋と筆子中」がそうである。編者の福田アジオが担当する若者組などは、近世の村の日常的な仕組みの代表例と言ってよい。それに対して現代へと向かう諸章では、社会に対して何かを強く訴えようとした運動ならびにそのための結集が中心になる。第四章「転換期の結社」などは、「草莽諸隊と新選組」をはじめ、正に時代を

駆け抜けた集団である。

総じて、『結衆・結社の日本史』は、アソシエーションをめぐる日本と西洋でどんな比較が成り立つかについて参考になることが多い。それは、アソシエーションという物差しを日本社会に当てるとどうなるか、について信頼性の高い輪郭をあたえてくれるからである。それゆえ西洋(あるいは筆者が幾らか覗いているドイツ語圏諸国)との異同をつかむ上でヒントになる。

### (現代日本と結社)

注目すべきは、『結衆・結社の日本史』の最後の第六章「連帯を求める現代の結社」で、次の四節から成る。一「思想の科学研究会」、二「《婦人》から《女性》へ、そして《おんな♀女》の結社へ」、三「結社としての全共闘」、四「現代のNPO・NGO」。

ここで選ばれているのは、先鋭な知識人たちによる試行錯誤の一例、フェミニズム運動、一九六九年を頂点とする学生運動、そして現代のいわゆる《非営利団体》や《非政府組織》である。現代日本の結社となると、これらが正面に現れるのは、決して同書の編者や各節の担当者の恣意ではない。むしろ多くの人々が抱いているイメージと合致している。ある種の鋭角性をもった行為への参画という印象である。取り上げられた団体や集団は、他の選択もあり得るだろうが、多少とも先鋭な問題意識をもった者たちの営為としての

アソシエーションという捉え方は、日本の現実を映している。同書の刊行以来二〇年余をけみし、その間に国家的案件となる数度の大災害に見舞われ、それへの救助・支援の形式としてヴォランティア団体の活動が幾らか軌道に乗った昨今ではあるが、基本的には、アソシエーションはなお強い問題意識に裏付けられた行動であり続けている。つまり、まったくの日常と言うには、なお開きがある。

## 〔二〕 クラブ・組合の社会的機能

これに対して、西洋諸国のアソシエーション、筆者の場合はドイツ語圏がフィールドになるが、そこでのフェルアインすなわちクラブ・組合の現在（と言っても半世紀かもう少し長いタイムスパンだが）というフレーズを挙げるとすれば、何が思い浮かべられるだろうか。

### （ドイツ語圏のクラブ・組合）

ごく平均的な答えは、こうなるだろう（ヘンケルス一九七四、一六一・ケーレレヘーツインガー「河野・訳」一九七八、一八一―一八二）。

先ず目立つのは歌唱クラブで、その小都市の周辺の村々だけで

も一二団体を数える。・・・他には、男性組合、女性組合、若者組合、未婚女性組合、またモチーフとしては体操、サッカー、水泳、ハーモニカ、吹奏楽、園藝、交通、飲食館主や伝書鳩飼育者や切手収集家の集まり、カーニヴァル、チェス、射撃、山羊の飼育など、そして農民、市民、音楽、ツーリスト、運送業者、軍人などの組合が存在する・・・

第二次世界大戦後の有力なジャーナリストで西ドイツの首都ボンから発信を続けたヴァルター・ヘンケルス（一九〇六―八七）が、ドイツのライン地方の小都市についてモデル・ケース的に描いた一節である。これからも窺えるようにアソシエーション（ドイツ語ではフェルアイン）は、先ずは普段の生活に縁の深い様々なクラブ・組合であり、それらが網の目となった日常の仕組みである。

こうした非常に多くの人々が何らかのかたちでかかわっているあらゆるふれた集団から、最も親近な種類を挙げられるなら、たとえばスポーツのクラブ・組合がそれにあたるだろう。しかもそれは、子供の頃からである。現代の日本の喫緊の問題とも重なる話題だが、ドイツの子供は、放課後の活動を学校でおこなうのではなく、自宅に近いスポーツ組合へ通う。したがって学校教員が放課後のスポーツ指導に掛かり切りになるといったことは考えられない。また日本では学校と言えば校庭が頭に浮かぶが、ドイツ（だけでなく多くの西

洋諸国)の場合、学校にはグラウンドがないのが一般的である。代わり近くにスポーツ組合の好みの(サッカーなりス水泳なり柔道なり)部門へ通うのである。そこにはボランテニア(多くはそのスポーツ組合のOGやOB)が大勢いて指導をする。会費は、低学年の児童の場合は非常に安い。サッカーなら日本円に換算すると(目下の円安の状況でも)一月千円未満、感覚的にはワン・コインといったところで、学年が上がると幾らか高くなる。しかしテニスや乗馬やサーフィンとなると月謝はかなり高い。その点は、日本のお稽古事で、ピアノに較べてヴァイオリンがはるかに高いのと似ているとも言える。

### 媒介システムとしてのクラブ・組合

日本と西洋との比較論議の一角に今も根強く残っているものに『世間論』と言われるものがある。これについては既に何度か取り上げており(河野二〇一五及び二〇一八)、ここでは繰り返さないが、その論調に付きものなのは、西洋は個人主義で、それゆえ個人が大きな社会に直接向き合っているとの教説である。しかし、ドイツ語圏における関聯文献を少し見るだけでも、日本の通念はたちまち覆される。さまざまな分野の識者がほぼ同じ指摘をしているが、たとえばドイツの社会学者の説明である(ジーヴェルト「河野・訳(二)」一三六)。

市民社会の結社としてのクラブ・組合の過去と現在

総じてクラブ・組合(「フェルアイン」)が現代の社会で特別の意味をもつのは、媒介システムとして機能していることによる。すなわちクラブ・組合は、個体・もつれた複合性・社会の大構造、これらの中で、相互作用的な刺激・イニシアティヴ・操縦・転嫁・仲介などの関係の水路を幾重にもつくっている。個体にとっては超越的な次元にそびえている見渡すことができず影響力を発揮しようのない社会、加えて価値・物象・諸々のグループ・変化と錯綜を伴ってもある社会が、個体の特殊な必要性と関心の尺度の下に分節され、見渡すことができ影響力を発揮できるものになる

他にも民俗学者アルブレヒト・レーマンは、初期の労働者の村の实地研究を踏まえて『組合には個体と町村体の公共性とを仲介する機能がある』との見解を示した<sup>⑤</sup>。スポーツ社会学からも、たとえばハンス・レンクがスポーツ組合の社会的機能の分析を通じて同様の考え方を呈示した<sup>⑥</sup>。両者とも、クラブ・組合の機能の多面性を取り上げたのなかでの指摘で、微妙な意味合いを含むが、先ずそれが大枠の捉え方である。

その限りで平たく言えば、そのままでは飲み込めない大きな社会を細かくほぐして喉を通るようにしているのがクラブ・組合で、そ

れが社会の隅々まで幾重にも機能している西洋の一面である。これはもう少し詳しく見ておいてもよいだろう。

### 統合機能とアイデンティティ機能

ハンスライエルク・ジーヴェルトは、クラブ・組合の主要な機能として『統合機能』と『アイデンティティ機能』を挙げた（ジーヴェルト一九八四「河野・訳（二）」一三二六）。そのさい『統合機能』については、先行するレナーテ・プフラウム（＝マインツ）の初期のコミュニティ研究をほぼ踏襲していることは注目される（同、一三一―一三二）。

組合は一面では社会的分節化過程の産物であっても、他面では村落の社会生活を高度にバランスあるものにして再び結び合わせるファクターでもある。すべての人々が、職業・宗派その他の違いを超えて積極的に参加するのは統合的な作用と言えるだろう。

次に、クラブ・組合のアイデンティティ機能は、その媒介機能と表裏一体でもある。大きな漠然とした社会で見失う自己を、狭い親密な場、およびそれと同質の多数の場との関係において個体が自己を確かめることを可能にする。もとよりそれは常にそうであるわけ

ではなく、その可能性がかなり大きいということである。ジーヴェルトはその留保を含めて、アイデンティティ機能を五項目にわたって考察した。その四番目と五番目はこうまとめられる（同、一三七）。

〔四〕クラブ・組合は、個体の『自己実現』の幅を提供できることがある。組合のなかでは、経験・行動の空間が間接的にはなお見渡しがさく開かれ方をしている。決定も、現実を見据えた直接的なコントロールの下にある。それゆえ個人は、自己自身への確かさと信頼を獲得し、緊張と転換を経験し、それによって（場合によっては）労働世界の疎外現象の埋め合わせをする。

〔五〕クラブ・組合は、再生とくつろぎ、さらにエモーショナルゆたかな行動・経験への希求に役立つことがある。

### ラルフ・ツオルによる地域のパワー・ストラクチャー批判

クラブ・組合（＝フェルアイン）への関心は、政治学においてもみとめられる。政治学の一部門である行政学ではクラブ・組合は普通に取り上げられる対象で、その関聯でこれまでも言及したが、今回注目するのは、（日本では未紹介と思われる）フランクフルト学派系のドイツの平和・紛争学者ラルフ・ツオルの研究である。ツォ

ルは、ミュンヘン大学、ドイツ連邦軍大学の教授の後、永くマールブルク大学で応用社会学を担当したが、その研究者歴の早い時期に取り組んだのはコミュニティを対象にした政治研究であった。ツオルがアドルノとホルクハイマーに学び、フランクフルト大学の助手となった頃、同大学の社会学と政治学の関係者によって一定地域に絞った調査研究が推進された。対象地には、フランクフルトの南東約七〇キロメートルに位置するバーデン＝ヴュルテムベルク州北東端の小都市ヴェルトハイム・アム・マインが選ばれた。このプロジェクトでは、最終的に《ヴェルトハイム・スタデー》として知られる三巻と補完から成る報告書がまとめられた。その中でツォルは全体の企画に関わる共に、特にその一冊『地方自治と権力構造』の編集責任者を務めた（ツォル一九七四）。

一九六〇年代末から七〇年代にかけて、当時の西ドイツでは大規模な市町村合併が進行したが、今の場合には直接的には関係しない。ヴェルトハイムが周辺村落を併せて広域となったのは一九七二年以後のことで、「ヴェルトハイム・スタデー」はその直前の時期を対象にしているからである。人口約一万人の頃の調査である。なお現在は、数度の合併による広域化によって約二万三千人を数える。ツオルの調査チームの大きな特徴は、ヴェルトハイム一帯で購読される地方紙四紙に焦点を合せたことである。新聞記事が出来る上がる過程とその特徴を地域の諸関係について問うことによって、世論

形成と地方行政の政策決定過程、そして公共性を、背景の社会諸集団との関係において明らかにしようとしたのである。そのために地元四紙の記事の分類と、それに関係する人々へのインタビューが組み込まれた。特に注目されるのは、地方自治体に大きな影響力をもつ主要な三つのグループが特定されたことである。工場経営者グループ（十数名）、名士層（八〇―百人）、市長を囲むグループ（十数名）である。このうち名士層については次のように説明される（同、二二〇―二二二）。

二番目のグループは、八〇人から一〇〇人で、社会心理学的な意味でのグループではない。組織形態に共通したものがあると言っても、具体的な共通の利害関心や同胞感情をもっているわけではない。共同性は抽象的な水準のものである。この二番目のパワー・グループに共通するのは、精々、名士層と言うことになるだろう。しかし名士という概念も、十九世紀的な狭義ではなく、あるいはそれだけではない。名士グループに属すには、先ず資産と教養が土台になる。たしかに資産と教養は、このグループの際立った特徴ではあるが、またそれ以外の人々も含まれる。商工会議所や労働組合や教区会議の幹部、またクラブ・組合の代表者などである。これらの人々をパワー・グループと呼ぶことができるのは、地方自治体の意思形成過程におけ

るキーマンの存在だからであり、それも規範措置ないしは規範コントロールの役割を果たしていることによってそうだからである。

先にふれたように、ヴェルトハイムでは、市議員選挙に必要な支援を得るには、ある程度の規模のクラブ・組合に属していること、なろうことならそこで確固たる役割を果たす存在であることがとめられる。クラブ・組合の応援は自動的に得られるのではなく、特定の規範的立場を引き受け、外部に対してクラブ・組合を代表していることが前提になる。したがって、クラブ・組合の利害関心を代弁することが期待できる限りにおいて、彼らがクラブ・組合のメンバーであることはその政治的立場の土台になる。しかしまたそうした立場を得ることによって、それらの人々は、クラブ・組合の規範システムを一定の限界内であれば改変できる立場に立つことにもなる。しかし、彼らはまた規範の有効性と遵守を重視する。それがあってこそ、グループ（クラブ・組合）はまとまることになり、またそれを前提にした彼らの活動可能性が確かになるからである。クラブ・組合が、その活動を地元紙が伝えることに殊の外執着するのは、ここから明らかになるだろう。しかも二つの意味においてである。先ず地元紙が裏付けの機能を果たしている限り、クラブ・組合の中でメンバーの誰かが改変を呼び掛けたり批判したり

することは排除され、それは即、名士層の立場の不可侵につながる。二つ目に、これらの人々は、地元紙というかたちで、自己の関心と相照らす支柱と拡声器を手に入れ、メンバーと共に自分の城を政治空間のなかにもつことになる。また規範について言えば、それは・・・連結項でありつづけ、名士たちも特殊なかたちでその規範にすがっている。

また第三のグループについては次のように描かれる。

ヴェルトハイムにおける狭義での政治的なパワー・グループは約二二人である。中心には市長がおり、したがって市長と頻繁なコンタクトを保つグループである。しかしこのグループも最終決定を握っているわけではなく、機能的には次の数種類の寄り集まりである。先ず、市議会の三つのフラクションの代弁者、企業の代弁者、教師・医師の代弁者、古くからの地元民である市民層の代弁者、そして規模の大きなクラブ・組合の代弁者である。ここでの諸個人は、これらの機能の幾つかを兼ねていることが多い。したがって、これらのグループの間には強い重なりがある。中核を占めるのは市長と特に密接な信頼関係にある二名あるいは三名で、その時々によって変わるが、市長が属しているフラクションやCDU（ドイツ・キリスト教民主同盟

盟) フラクション、ならびに「自由選挙人党」の代表者から成る。なお政治的な議論あるいは決定の課題によって、この中核グループは多少拡大する。このグループに属していることは、市長に常に接触でき、また他よりも早く情報に接して自治体政治の決定事項へのそなえができることを意味する。・・・しかしこの政治的決定グループがどのようなものであるかについては、市長の下にある官庁部局や担当者など機関との関係を見る必要がある。・・・

語注を加えると、ここで名前が挙がる「自由選挙人党」とは、地方政治に限定した一種の政党で、一九六五年に最初の全国的な連絡組織が結成された。路線は保守リベラルで、現在も地方政治では勢力を保っている。また教師・医師と言われるのは地元の教養層で、教師は主に管理職にある上級教師を指す。同じく古くからの地元民である市民層とは、都心に老舗専門店(薬局や不動産会社や眼鏡店など)を構える事業主などで、地域企業の株主でもある地元で続いてきた資産家を言う。

第一のグループの工場経営者を含めた三つのグループは、地元の世論形成の機関である地元紙にとって、経営的にも購読者という形においても支柱である。ツオル・チームの調査研究は、地元紙の記事の種類とその背景を、一〇〇人を超える関係者へのインタヴュー

をも含めて明らかにしたものであった。ただし厚い報告書にも拘わらず、具体的な記事はあまり見られず、政治、経済、学校、スポーツといった区分までである。それに対して政策決定過程への関係者の関与などでは、市長へのインタヴューなど聞き取りにおける会話も含めて収録されている。しかしその場合も具体的な事例の紹介はほとんどなく、関与の過程や手続きに重点が置かれる。またそれらが数値化されて数十種類の表に整えられている。案件を具体的に挙げず、手続きに詳しいのは、政治学・社会学の方法のようである。と共に、調査研究の結論が地元紙に対してもそれを支えるグループに対しても強度の批判を含むものとなったために、インタヴューに応じた人々に関わる事案そのものを挙げるのがはばかれたのかも知れない。が、ここで注目するのはそこにクラブ・組合が位置付けられていることである。もともと、正面に立つのはメディア批判である。あるいは批判によって改まるとも言えないような地方のパワー・ストラクチャーである(同、二三八―二四〇)。

ヴェルトハイムの地元紙がつくり上げるのは、政治的公共性ではなく、代弁的公共性である。すなわちその機能は主要には、都市の執行権力と名士たちのスピーカーたることにあり、それによってリアルな政治的關係を反映する。

地元紙のこの構造と機能のために、民衆が少なくとも地方政



治の動向について適切な情報を得る望みも、世論形成過程における多数者の関心の代弁を地元紙に見出す最後の希望も消え失せている。ヴェルトハイムの地元紙は、都市の政治的関係をほとんど間断なく反映する。市長と市議会の決然たる型、また市長と市議会が公共性に登場する決まった型は、新聞の地域関係欄の均一性とアイデンティティとも一致する。この点で、地元紙四紙の間には、特に際立った差異はみとめられない。・・・同一日の地元紙四紙の記事について見ると、記事がほとんど同じである割合は一一％から四八％であり、特に政治記事の場合は一四％から六八％になる。報道のこの絶対的性格は、政治的決定過程における市長の主導性と名士層によるその裏打ちと符合する。地元紙は、政治動向に関するオフィシャルな情報のための報道機関の機能を果たし、また都市の名士層が自画像を呈示する場ならびにそのスピーカーの役割を受け持っている。新聞各紙は、特に（この調査研究の）インフォーマントでもあるこれらの人々の関心事である公的な動きや出来事を伝えるにすぎない。クラブ・組合に関する記事は地元紙四紙を通じて優に二〇％を占めるが、ローカル編集者という語が正にぴったりで、新聞の読者に向けてであるよりクラブ・組合（と言うことは名士たち）のために書かれている。・・・

権力構造が地元紙に反映されるスタイルについて繰り返して

言えば、それを決定しているのは特に二つのファクターである。狭隘な市場で四紙が競合していることと、新聞社および編集者は地元の権力構造に地歩をもたないことである。脆弱な財務基盤（そもそも財務基盤があるかどうかも怪しいが）のために新聞社主の立場を考えると、読者や広告主を減らすことは避けなければならない。リスクを小さくするためにも、現状が一番なのである。現実を了解すること、それは平準と没競争を意味するが、その赴くところ、ローカル紙に関心を寄せる諸々のグループに対して選択の余地をなくす意図がひそんでいることになる。どれも同じなら、新聞を変えても意味がない、というわけである。内容面では、批判の拳に出ることを避け、賞賛を基本原理とするという適応はたしかに効果を挙げている。かかる報道姿勢を押し通すために、編集者は事実関係からまったく目をそらし、自分たちが財務面で存続する上で重要な人々やグループに焦点を合せるしかない。所与の条件下でのジャーナリズム活動にとって、批判に踏み込まないのは最も大事な資質である。角を立てないことを念頭に紙面をほどほどに埋めてゆくため、際立った報道対象は除外され、日時や実態をまざまざと伝えることも度外視される。ヴェルトハイムでは権力を扱うのは基本的にタブーである。ソーシャル・ディスタンスの小ささの故に批判は抑え込まれるわけだが、それは、権力があまり問

題にならないカーニバル企画やスポーツ祭典の報道でもそうである。そうした枠付けの中で、新聞編集者にとって選択の余地はきわめて小さい。外に広く目を向けることもなく、新聞編集者たちには、ルーティン以外のことは考えても仕方がない状況である。それには、ヴェルトハイムの諸関係だけに責任があるのではなく、新聞のあり方も関係する。かく、すべてのフアクターが絡み合うところ、一つの様相に収斂する。すなわち、地方自治体において工業化が蔦進するのは裏腹に、多くの分野では工業化前の特質であるような様相が浮かび上がる。

かくラルフ・ツォルは、高度経済成長期のドイツの小都市が、コミュニティの構造としては因習的なパワー・ストラクチャーであることを明るみに出した。むろん、あからさまな支配や強権ではない。デモクラシーの形式的手続きを経つつ、工業経営者、地元の名士層、行政権力が緩急さまざまに絡み合い、呼応しつつ新聞記事の形式で地元世論をつくり、自治体の政策決定に関与し、また公共性とは何であるかを提示する。クラブ・組合はそこでの不可欠の一環である。もつともツォル・チームの調査研究が一九七〇年代初めであったことから、今日では相対化しておくことも必要であろう。すなわち高度経済成長の一翼をになう地域となることが自治体にとって喫緊事だった時代であった。それゆえ工場経営者の利害関心が優先され

ることにツォルは強く注目した。しかしその後の動きを組み込むと、因習的なシステムの外側で市民運動が徐々に勢いをもつのもその頃からであった。またツォル・チームは地域のシステムに限定しており、その限りでは当たっていることが多いが、同時に国政レベルの住民意志となると、必ずしもその延長線上にあるわけではなかった。また地方新聞の意義をどう考えるのか、という問題も加わる。地元の官庁や企業の事業計画を特集したり、めぼしい人事を伝えたり、祭りなどのイベント企画や地元のスポーツ・チームが臨んだ対抗試合における選手や監督の活躍を取り上げたりするのは、地方紙ならではの持ち味である。地元企業の広告も、新聞社の収益であると共に地域への情報でもある。そうした記事では、たしかに《批判の挙に出ることを避け、賞賛を基本原理とする》ということにはなるだろう。また官庁や有力企業が推進する開発計画などでは、地元紙は旗振り役になることが多い。メディアの使命は批判にあるという観点からは物足りないのはたしかであるが、すべての地方紙が若きカール・マルクスが健筆を揮った『新ライン新聞』になるわけではない。もつとも、後者の場合は、十九世紀半ばのライン地方の中流市民層や新進企業家たちには支配高権であるプロイセンへの対抗姿勢があり、それも含めて価値観を代弁する若手論客がもとめられたという要素もあったのである。

とは言え、ツォルが指弾したような地域のパワー・ストラクチャー

が一貫して一定の力を保持しているのは事実である。ここで言及されるように、地方議会の議員になるには《ある程度の規模のクラブ・組合に属していること、なろうことならそこで確固たる役割を果たす存在であることがもとめられる》というのは、今日もそうである。市町村長にも議員にも、形式的なものも含めてかなり多くのクラブ・組合のメンバーであることがもとめられる。と言うより、たいていの地方政治家は何らかの出身団体を背景にしている。有力なクラブ・組合（スポーツ関係が特に多い）の役員は地元の政治エリート候補者であり、《地方政治家のキャリア形成》の型ともなっている（ジ・ヴェルト一九八四「河野・沢」一四〇―一四四）。またそれが社会に定着していることは二〇〇〇年に書かれたドイツ人の国民性に関する論説においても知ることができる（パウジンガー二〇〇〇「河野・沢」第二章第五節「ドイツ人は三人寄れば一クラブ」）。

### 〔三〕 歌唱クラブと歴史の一齣

クラブ・組合の現在を取り上げたのだが、それとの関聯で過去の一齣にも目を向けようとおもう。それは現在と対比するためでもあれば、一貫したものを探るためでもある。（世間論を説く人たちが見ようとしないう現実だが）クラブ・組合との何重もの網目の中で暮らしている西洋の人々にはそうした諸関係は安堵をあたえてくれる

一方、わずらわしいものでもある。その辺りも歴史の一齣を取り出すことによつて見えて来るだろう。

#### マックス・ウェーバーが事例に挙げた歌唱クラブ

アソシエーションすなわちクラブ・組合を日常の次元でみてゆくと、先のヘンケルスの引用文でも《先ず目立つのは歌唱クラブで……》とあるように、歌唱クラブは真つ先に思い浮かぶ種類である。同様に大きな比重を占めるのはスポーツのクラブ・組合であろうが、これは改めて取り上げることになるだろう。なおマックス・ウェーバーは《政党からボーリング・クラブまで》と謳つてフェルアイン研究の必要性を説いたのだが、応急的にいくらか踏み込んだ具体例は《歌唱》であった。卑近な世相だったからである。

何らかのフェルアイン、繰り返しになりますが、政党から（パドックスに響くでしょうけれど）ボーリング・クラブまで、そうした任意のフェルアインと、語の最広義においてですが《世界観》と呼んでもよいものとの間にはどんな関係があるのでしょうか。つまりそうした関係がどこでも何らかのかたちをとっているのですが、またそれは思いもよらないところにおいてもです。しかも非常に多様な仕方です……他面では、ほとんどいづれのフェルアインも（原理的にそれを避けようとする

るものも含めて) 何らかの仕方では《世界観的な》内容を引き寄せています。ある意味では、ドイツの歌唱クラブは言わずもがなですが、ドイツのボーリング・クラブですらそうだと云っても構いません。そこで、皆さん、少しこれを取り上げますと、ドイツで歌唱クラブの組織が開いたとき、それは、私の見るところでは、ちよつと予想がつかないような分野にも大きな影響を及ぼしました。たとえば政治の分野です。喉を振りしぼつて胸いっぱい高揚した感情を吐露するのを習慣にしている人は、それを自分の行動につないでいるわけではなく、また表出された高揚感と相照らす高ぶつた行動へ進んでゆくわけでもないのですが、これこそ歌唱クラブにおける営為の本質なのです。簡単に言いますと、受動的な意味合いにおいてですが、手もなく《よき国家市民》になってしまふのです。支配者が、そうした団体を大歓迎したのは不思議ではありません。正に、《歌うときには、先ずは落ち着いて坐ること!》です。そうすれば高ぶつた感情も力んだ行動もおさまりますから。

熱っぽい話し振りはともかく、この事例は第一回社会学者大会に居合わせた人々にはすんなり頭に入つたと思われるが、日本ではどうだろう。誰もが知るありふれた現象をなぞっているのだが、もし理解に戸惑うことがあるとすれば、以下の解説もあながち無駄ではな

くなるだろう。

根本的なところまで掘り下げれば、歌謡をめぐる日本と西洋との構造的な差異、とりわけ教会儀礼における歌唱の役割とその影響の大きさ、それゆえ世俗歌謡の幅が日本とは異なることを考えてみなければならぬが、それは横に置こう。またこの業務報告は一九一〇年で、第一次世界大戦後に数多く結成されることになる労働者歌唱クラブはまだ存在しなかった。したがって、歌唱クラブで歌われる歌謡の定番は、ドイツの風土や文化を高らかに・あるいは甘美に・あるいは哀愁をこめて歌う国民性と呼応する歌謡であったが、ここでマックス・ウェーバーが指摘するのは、それをも超えた歌唱行動の特質である。歌唱クラブは、単に歌うことにとどまらない集団をつくるという質的に違つた次元にあることを意味し、またその次元にあることによつて結集のモチーフ(ここでは歌うという行為)を介して結社の授与的性格が実現されるというウェーバーの独自の理論が高ぶつた口吻としてこぼれ出た観があった。たとえばすぐ後の「理解社会学のカテゴリー」(一九一三年)として概念的な表現をとる考察である。この面でのウェーバーの理論については別に取り上げる機会もあるだろう。が、これからも推測できるように、ウェーバーは、歌唱クラブを例にとることによつてクラブ・組合を問題にしながらも、むしろ結社の本質に重点をおいており、それがためにクラブ・組合をめぐる歴史研究とも(現実の諸現象を一

聯の脈絡の下に把握する) 社会学的研究ともただちには重ならなかった。ウエーバーが喫緊の課題と叫んだにも拘わらず、すぐには刺激とは受けとめられず、また第二次世界大戦後になってようやく本格化するフェルアイン研究にとつても、(時間的にも内容的にも) 間接的な刺激にとどまったのは、必ずしも奇異ではなかった。

### ハンス・シュタウディングガーの音楽結社の研究から

クラブ・組合(ドイツ語のフェルアイン)の研究において、早い時期に書かれ、それゆえ今日の観点からは問題もあるものの、重要な文献であり続けているのが、ハンス・シュタウディングガーの『文化組織としての結社に見る個体と共同体』で(シュタウディングガー一九一三)、結社と訳した原語はフェルアインである。マックス・ウエーバーの弟アレフレート・ウエーバーは『文化社会学』の提唱者として知られるが、その指導の下で作成された博士論文で、師の『文化社会学叢書』の第一巻として一九一三年に刊行された。シュタウディングガーはその後、第一次世界大戦への従軍を経て、中央省庁の一つ、プロイセン商務省で高官となった。そしてヴァイマル共和国末期には社会民主党に属して一九三二―三三に国会議員となったが、ナチス・ドイツの成立と共にアメリカへ亡命し、後にニューヨークのニュースクール大学の社会学の教授となり、第二次世界大戦後、ドイツとアメリカの懸け橋となった。なお父親は『生活協同

組合』運動を牽引した新カント派の実践哲学者フランツ・シュタウディングガー、兄はノーベル化学賞受賞者ヘルマン・シュタウディングガーである。

シュタウディングガーの著作はサブタイトルでもある『音楽による社会的組織』の成立とその後の推移を、中世から階級社会の一九世紀末から二〇世紀はじめまでを扱っている。が、ここでは論作における重点の一つである『歌唱クラブ』の成立の箇所に注目するにとどめる。ちなみにドイツの歴史学界でクラブ・組合研究が軌道に乗る上での里程標はトーマス・ニッバーダイの論説であるが(ニッバーダイ一九七二「河野・訳」)、ここでは十九世紀の初め頃、音楽をモチヴェーションとした結集がクラブ・組合の重要な一面を占めたこと、またその種の結社には『ハーモニー』や『コンサート』の概念が好んで掲げられたことが特筆された。その理解は、シュタウディングガーの考察を踏まえてもいたのである。なお付言すれば、その時代は西洋音楽史の大きな転換点であった。おそらく審美の意味での音楽感覚の一般的な変化も進行していたと思われる。もともと、それ自体かなり複合的、ないしは諸要素に区分することができる性格にあつたろう。その一つは音楽が貴族層の占有ではなくなつたこと、したがって近代市民社会の音楽へと変わったことであつた。それは普遍的な人間性に照応するものとしての音楽、さらに人間の内面と関わるものとしての音楽でもあつた。音楽をモチーフとする結社が

世相となったのは、それが普遍的な人間性をモチーフとして人と人が集うことができる場と考えられたからである。

### （ツエルター「リーダーターフェル」の成立）

シュタウディングラーの研究からその部分を少し抜き出す。むしろそれにも先行研究がなかったわけではなく、早く一九世紀後半の（大バッハの伝記研究で知られる）音楽史家フィリップ・シュピッターが解明していた歴史的経緯もそこには活かされている。とまれ、ドイツ語圏における歌唱クラブの成立の起点に立つのはカール・フリードリヒ・ツエルター（一七五八—一八三二）が一八〇八年にベルリンで設立した「リーダーターフェル」であった。またその土台には作曲家でハープシコード奏者カール・フリードリヒ・クリステリアン・ファッシュが一七九一年に創設した「ベルリン・ジングアカデミー」があった。ファッシュは一八〇〇年に逝去し、弟子のツエルターがそれを引き継いだのである。その頃すでにメンバーは千人にもなっていた。そのアカデミーでは音楽を演奏し鑑賞するだけでなく、自由な会合であることが旨とされた。ツエルター自身がそれを記している。

開花したうるわしきベルリン、老いも若きも、貴族も中流も……男女・身分の区別もなく、術藝をたしなみ教養をそ

市民社会の結社としてのクラブ・組合の過去と現在

なえた人間の最も繊細な感覚をなごませる集まり、そこは春の花壇の如く、人為的に選び出すことなく、男女も身分も混じり合っていた。あらゆる身分・年齢・職業の混合であった。

《特定の社会（層）のための集まりではない》ともツエルターは述べている。それを受けてシュタイディングラーは、ツエルターのクラブは《デモクラシーの集まりであり、それは音楽の練習の場というだけではなかった》と説明している（シュタウディングラー一九二三、六〇）。すなわちフランス革命が表面に押し出した理念でもある自由な人間の自由な集まりであり、それゆえ《クラブ・組合の時代》の端的な表れであった。

そのアカデミーを土台にして新たに歌唱クラブが構想された。一八〇八年春のことで、会合においてツエルターは計画を話すうちに気分が高揚し、来るべき結社をアーサー王の円卓の騎士団に譬えた。そしてそれが歌唱クラブの名称となった。「リーダーターフェル」で、ターフェルはテーブル、したがって円卓につどう歌の騎士団である。かくして一八〇八年十二月二日に歌唱クラブは発足した。円卓は座席に上下の区別がないことを意味し、また騎士は二四人であったという当時の伝承の一つをヒントにして、二五人目がメンバーの選出によるリーダーという構成であった。なおクラブの成立経緯や運営については、ツエルターがゲーテに宛てて詳しく書き

送っている。またベルリンで発足した「リーダーターフェル」は、やがて各地でそれに倣う男声合唱団が結成される動きへとつながった。

### (ネーゲリの歌唱改革)

影響力の大きな刺激源は他にもあった。スイスの音楽理論家で楽譜出版者ハンス・ゲオルク・ネーゲリ（一七七三—一八三六）である。ネーゲリは、一八〇五年にチューリヒに「ジング・インスティテュート」を設立して合唱の育成を図り、次いで一八一〇年に男性合唱クラブを発足させた。もともと、ネーゲリにも先行者はいた。他ならぬ父親で牧師のハンス・ヤーコプ・ネーゲリで、すでに一七七二年にチューリヒ南郊ヴェツィコンにおいて「ジング協会」の運営者となった。また作曲も手掛けた音楽の識者であると共に、教育改革と農業改革（特にジャガイモ栽培の普及）に情熱を燃やした啓蒙主義者であった。長男のハンス・ゲオルクが一八〇八年にカトリック教会の神学者ヨースト・ベルンハルト・ヘーフリンガー（一七五九—一八三七）と共に「スイス音楽協会」を設立したのにも、それが背景の一つとして考えられる。当時は町村の初等教育には地域の司祭や牧師が大きく関わっており、ヘーフリンガーは視学官として現場を熟知した教育改革のオピニオンリーダーであった。ただしヘーフリンガーは、啓蒙主義のペスタロッチ系の教育に対抗的な立場をとるカトリック教会の大神学者ヨーハン・ミヒアエル・ザイ

ラーの教育思想の情熱的な弘布者であった。ネーゲリとヘーフリンガーが宗派の違いを超えて提携した詳細は不明であるが、それだけ教育改革の必要性が切迫していたと考えられる。とまれ、ネーゲリの影響を受けた歌唱運動は教育改革への志向を併せもったのが特徴である。ネーゲリ自身もスイスだけでなく南ドイツ各地で講演をおこなって歌唱クラブの設立を促した。その一般化の里程標となるのは一八二三—三三年間にシュトゥットガルトにおいて結成された男声合唱クラブ「リーダークラント」(歌の花輪)で、以後、その名称を冠した歌唱クラブが各地でつくられていった(シユタウディングー一九一三、六六—六八)。なおネーゲリの歌唱改革では理論的な裏付けが吸引力となったところがあり、特に四声合唱が基本形式として一般化したのはこの《歌唱者の父》(Sängerater)の影響が大きかった。と共に、それは他のさまざまな改革への志向とも重なっていた。

### (ロマン主義と国民歌謡)

もう一つ押さえておかなければならないのは、歌唱そのものに起きた変化である。一口に言えば、ロマン主義と国民歌謡である。ツェルターが主宰した「リーダーターフェル」では、歌種はメンバーが持ち寄ったさまざまなものがあり、高尚なものという漠然とした基準で、既存のものもあればメンバーの創作もあった。見ようによれ

ば試行錯誤の時期で、逆に言えばどこかへ落ち着くのは必然であった。大局的にはそれが趨勢であったのであろうが、ベルリンの「リーダーターフェル」ではそれは人的な変動と重なった。一八二〇年代に入ると次世代の旗手としてカール・マリア・ヴェーバー（二七八六—一八二六）が関わるようになり、作品をも提供した（シュタウディングガー一九一三、六〇）。ロマン主義オペラの代表的作品「魔弾の射手」（一八二二年初演）の作曲家である。病弱で早世することになるが、ヴェーバーがその担い手の一人でもあったロマン主義的な歌謡が歌唱クラブでも好まれるようになっていった。

しかもそれは一般の動向とも重なっていた。《民謡》という名称の下、国民歌謡と言えるような歌謡種が人々の耳をとらえ心に響くような状況がひろがったのである。ちなみに次の論説は、それを的確にとらえたものの一つであろう（パウジンガー二〇〇〇「河野・訳」八二）。

ロマン主義の擡頭から数十年を経ずして、何十というふるさと歌謡が成立した。ここでは、畑は森に和し、山岳は湖沼に応じ、ふるさとの土地への愛はリフレインとなった。その多くはふるさとの土地を挙げて歌ったが、それは国土の全体ではなく、小さな地域のことであった。それにもかかわらず、それらの歌は交替が可能であった。《北海の波が岸辺を打つ》とはフリー

スラントの歌である。すなわち、砂丘にエニシダが花をつけ、鷗が鳴き声をきかせ、海鳴りが轟く土地の歌である。しかしそれは少しも特殊なものではなかった。歌謡者の一団は、海とはまるで無縁な地方や、それどころかアルプス地方にまでこの歌をたずさえ、ふるさとの歌として溶けこませた。それは、南と北の国民的なきずなといったものではなかった。説明をつけるとすれば、この種のあらゆる歌謡では、憂いをふくんだメロディーが歌詞を影の薄いものとしているためだけではない。これらの歌謡が交替可能なのは、特殊な地方的な描写において自然が具体的ではないことによるのではなく、むしろそこに自然一般が提示されることによる。すなわち、手つかずの観を呈する自然、健康ながら神秘性に富んだ自然である。

ドイツ人にとって自然とは何か、という考察の一節で、手つかずにして健康かつ神秘的なものに仕立てられた自然をあるがままの自然と見誤る心理をえぐっている。が、それは誤認をあげつらうシンシズムでない。近代とその延長線上にある現代も含めて、その基底にはアクロバットのな心理構造がひそんでいることを指摘している。安定した平面と受けとめられている土台が実際には傾斜をしていること、それを解明すること、またどのようにして解明するかを課題としたのが、ヘルマン・パウジンガーによるドイツ民俗学の改革で



あった。

民俗学の方法論はともあれ、ロマン主義の歌謡の分野への浸透、ないしは歌謡におけるロマン主義とは、狭い空間の地元の伝承歌ではなく、その様式を取り入れた国民的な歌謡ができてゆくこと、またそれが歓迎されたことを意味した。ちなみにそれは服飾でも似ており、たとえばアルプス地方の元は特定の用途と結びついた服飾（たとえば移牧労働に適した仕様）が広く国民的な規模で懐かしさや風土性を感じさせるものとなっていった。歌謡の場合は《憂いをふくんだメロディー》は幾つかの指標の一つであるが、総じてロマンティズムを湛えた曲調の歌が広い地域で好まれるようになった。もともとそれが完成にまで行き着くのは十九世紀後半から末で、そこで現代の人間が国民的な歌謡遺産と感ずるものが形成されることになる。十九世紀前半はそうした局面に向かって事態が動き始めた時期であった。

### 村の歌唱クラブ ― ケーレレヘーツインガーの研究から

以上のような時代状況を押さえた上で、もう少し歴史的現実を目を走らせようと思う。ここで注目するのは、歌謡クラブの早い時期の動向を、地域の現場、特に村の様相との関係で解明を試みた民俗学者クリステル・ケーレレヘーツインガー女史の研究である。ヘルマン・パウジンガーの高弟の一人で、特にコミュニティー研究をレ

パートリーとし、またそこにクラブ・組合を組み込むことにおいてパウジンガー学派の特色を發揮した。東西ドイツの統一後、イエーナ大学の教授となったが、ここで取り上げるのは、ずっと早い時期の「コミュニティーとクラブ・組合（フェルアイン）」という論説である（ケーレレヘーツインガー一九七八「河野・訳」）。その論説においてケーレレヘーツインガー女史は、クラブ・組合（フェルアイン）の歴史的理解において基本となっていたテーゼの洗い直しを試みた。歴史学者ニッパードイは、一八一〇年代から一八六〇年代までの自ら《フェルアインの時代》と名付けたエポックの特色として、フェルアインすなわちクラブ・組合は都市を起源にするというテーゼを立てていた。またそこには屢々、クラブ・組合の結成にはよそ者のイニシアティブがはたらいたという理解が重なった。それは概括的には間違いではないが、村にクラブ・組合が導入される経緯を構造的にとらえる必要がある、というのがケーレレヘーツインガーの主張であった（同、一八七）。

フェルアインという文化的現象の場合、歴史的推移と社会的構造の相関が課題になる。そのために二つのことがらを挙げたい。一つ目は、フェルアイン研究はそれ自体、地域研究の密接な構成部分になること……二つ目は、論理的帰結として地域研究は、その不可欠の構成部分であるフェルアインの分析に

なることである。これはとりもなおさず、『村』はその歴史性においてはどうであったか、またどうであるかを問うことを意味する。一口に言えば、村の中のフェルライン、これが私たちのテーゼになる。が、これは、起源に関わる真正の都市的展開からの派生としてのみ扱うのではなく、特定の歴史的諸関係と必要性からその都度独自に発展した現象として取り上げるということでもある。

なお女史のその論説は、一九七〇年代にテュービンゲン大学の民俗学の研究機関「ルートヴィヒ・ウーラント研究所」が調査を蓄積していたシュヴァーベン地方キーピング村の調査研究とも聯動している。とまれ、キーピング村において最初につくられたフェルラインは歌唱クラブであった(同、一九五)。

「歌唱クラブ『歌の花輪』キーピング」は、一八五三年に設立された。初代のリーダーは教育長ヨハネス・ハラード、亡くなったときはヴァルトゼー代官区ハイスターキルヒの学校教師であった。……それに至る前史や構成あるいは結成集会については多言を要しまい。多くの場所と似たようなもので、『心を躍らせた男性たち』をたちまち『覚醒させた……ドイツの歌謡への愛』や憧憬といった時代相応の説明でしかないからである。

この動きが十九世紀半ば過ぎであるのは、村が必ずしも先進的ではなかったからである。一八四八年革命にも乗り遅れていた。が、時代の波は確実に小村をも洗っていた。一八四〇年代は天候不順による農作物不作の年が多く、また聯作障害が西ヨーロッパの広い地域で一気に表面化したことによる未曾有のジャガイモ飢饉もあり、それらも革命の素地になったと言われる。並行して貨幣経済が活発になり、村では住民構成に変化が生じていた。才覚のある村民たちが伝統的な生業システムに甘んじず、外部との接触や新たな生業形態に進出しており、そのため村の秩序に変化が起きたのである。その一つの結節点は村の司祭のステイタスであった。村の司祭あるいは牧師の歴史的な位置づけにはここでは立ち入らないが、(教会官庁によって派遣されることでは)広義のよそ者であると共に、支配システムの一環でもある特別な存在であった。広い世界で何が起きていくかは、多くの場合、司祭(牧師)を通じて村に情報もたらされ、また教会と連繫した領邦支配者から見た意味付けがなされていた。村の公共性とは教会公共性に他ならず、総じてそれは従来の支配形態や村の運営と重なっていた。

しかし時代状況の変化は、村に一種の流動性をもたらしつつあった。それが、クラブ・組合の代表的な一つとして歌唱クラブがつくられた背景であった。それは次の三点にまとめることができる。一つ目は結成されたクラブでうたわれる歌謡の種類であり、それは大局的

な精神史の局面ともつながっていた。二つ目に領邦政府と教会官庁が推進した教育改革である。三つ目に、新しい職種や村外との関わりで村人の中には、新たな経済力をもつ者たちが現れたことである。もともと、古くからの名士層で時代の変化に敏感な者もそこには含まれた。歌唱クラブを結成したのは、こうした人々であった。

解説を加えると、一つ目については、歌唱クラブで歌われたのは地元の伝承歌ではなく、広い世界に関心を向ける人々を《覚醒させた・ドイツの歌謡》、すなわち国民的歌謡であった。歌謡は、ロマン主義と国民国家の理念の結合という時代思潮の端的な現れであり、歌唱はそれへの参画であった。補足して言えば、村で結成された歌唱クラブと言っても、村の伝統的な文物（祭りや歌謡）を保存するといったモチヴェーションはなかった。それが現れるのは十九世紀から二十世紀の転換期まで待たなければならぬ。歌唱クラブを成り立たせたのは大きな時流を在地に導入するという広義での啓蒙であった。二つ目に、この時期には領邦政府も教会官庁も今で言う近代化の必要に迫られていた。その一環としてこの場合は司祭を中心に運営されていた教会堂運営と村民の子弟への教育を合理的なものに改変することが課題となっていた。そこには教会堂には不可欠な典礼における合唱団の整備も含まれた。この時期、キービゲン村が属している世俗権力であるヴュルテムベルク王国の政府は音楽教育の推進のために特別予算を組んだほどである。司祭を中

心とした教会公共性は、王国が進める近代化から見ても、改めるべき因習の側面を見せていたのである。三つ目に、歌唱クラブを設立したのは、村の中である程度経済的に力をもつと共に、時局の大勢をつかんだ人々であった。ケーレレヘーツインガー女史は、この時期にキービゲン村において教会と司祭をめぐって起きた幾つかの事件に検討を加えている。たとえば司祭の方も、時代に対応するためにこの時期にカトリック教会の刷新運動となっていた「ピオ協会」を自己のイニシアティブで村に導入しようとしたが、村民は反応しなかった。しかし村民はカトリック教会そのものに反発していたわけではなく、村の有力者三人が墓地に新しいチャペルと付属の品々を寄進したときには、キービゲン村を宗教面で管轄するロツテンブルクの司教が献堂式を行ない、それを村民は《村の祭り》として祝った。しかし司祭が影響力の回復を託した折からの奇跡の発現に對しては、村民は無視を以て応えた。これらの一聯のできごとを分析することを通じてケーレレヘーツインガー女史は次のような結論を導いた（同、一九九―二〇〇）。

一八五〇年代半ばには司祭と村の関係には平穏がもどってきた。これは、十年以上くすぶっていた危機に変化が生じたこととその終わりを意味した。司祭と教区信徒の間には常に対立が潜在していたが、あからさまな競争を経て、教會的公共性と

村落市民的公共性の二分野の併存へと移行したのである。かつては、決まった宗派による領邦国家のなかで、教会は、村の唯一の文化担当者として、独自の機構による幾重にも確かな領域を保持しており、それを超えるような追加的な支配安定のメカニズムを必要としなかった。ところが、その独占的な位置が、今や世俗的な側から、すなわち自立した構成をそなえて新たに進展する村の公共性の挑戦を受けるようになったのである。フェルアインは、そうした競合の最も早い表出であり、同時に作用力をもつ機関であった。

以上は歴史の中のミクロな一齣であるが、ここにはクラブ・組合の本質について一般化できるものが含まれている。

### 本稿の帰結

クラブ・組合は、市民社会の中で、何らかの趨勢を読んだ数人あるいはもつと多くの人間が新しい局面を切りひらくために集まる結社である。それによって社会の中にこれまでなかった切れ目が生じるということでは、その機能は（先に挙げたレナーテ・プフラウムがコミュニティー研究に定着させた術語で言えば）社会の分節化にあたるだろう。しかしまたここで例にとった歌唱クラブの事例が示すように、社会の大きな趨勢を小さな現場に取り入れるという構

造から、社会の大勢への批判や抵抗が持続することは難しい。もっとも、階級を前提にして結成されるフェルアイン（たとえば労働者歌唱クラブ）では支配階級への批判や抵抗が特質となることがあるが、それはフェルアインというより特定の階級に限定されていることから生じる事態である。その点では、フェルアインは長期的には体制に組み込まれることが一般的で、マックス・ウエーバーが歌唱クラブの保守的性格を身近な現実として挙げたのは、もつともであった。またフェルアイン（＝クラブ・組合）研究の必要性を早い時期から説いてきた民俗学者ヘルマン・バウジンガーも、地域の日常的なフェルアインについては批判的である（バウジンガー二〇〇〇「河野・訳」七九―八〇）。

狭い意味での政治的活動は、一般にフェルアインではもとめられない。政治にかかわるのなら、種々の政党があり、住民運動の諸団体もある。その点ではテーゼの形で言い表すなら、ドイツではフェルアインが大きな意味をもっていると言っても、フェルアインはそもそも十九世紀の市民社会の産物であり、それゆえドイツ人の政治的覚醒を証しているのではなく、むしろ長期にわたった政治的失神状態と中性化の証左にはかならない。

バウジンガーは歌唱クラブの現状についても、（それですべてを言

い尽くせるわけではないにせよ)部分的には典型と言える現象を記している(バウジンガー二〇〇六、七九―八〇)。

フェルアインの現状について最もよく耳にする愚痴は、後継者がいない、というものである。若者が関心を示さない、と言う。しかしこれは、一部のフェルアインにあてはまるにすぎない。たとえばツェル(「訳注」地名)での調査によれば、後継者難に苦しんでいるのは半数だけである。多くの場合、必要性の低下は容易に説明がつく。若者たちが楽器をあつかうことに喜びを覚え、それは、彼らが歌唱クラブに距離をおいている事実と照らし合う。吹奏楽は調子が何となく変わってきており、他方、ドラマチックな多声コーラスは頭打ちである。六〇歳代や七〇歳代が熱っぽくポリフォニックで《大事な宝はもはやない》と声を張り上げても、若者たちは特に惜しいとも感じない。

語注というほどではないが、ここで言及されるフレーズはシュヴァーベン地方のよく知られた国民歌謡の歌詞《薔薇もカーネーションも、ただ悲しく萎むだけ。サクランボもクローバーも枯れ、大事な宝はもはやない》<sup>(1)</sup>である。大ざっぱに言えば、たしかに歌唱クラブは高齢者という印象がある。しかし今日では地域のスポーツ組合の一部門となることが多い吹奏楽団や鼓笛隊は決して不

人気ではない。

なお、これと併せてバウジンガーは、若者が関心を示す住民運動もまたフェルアインという結集形態をとることに注意を促している。衰頹する種類がある一方、フェルアインは市民社会の自由な結社という本質からは、絶えず新たなモチーフを結集軸として形成され、それによって社会に切れ目を生じさせる。新たな分節過程への萌芽であるが、むろん分節に関与するところまで進むかどうかは未知数である。とまれ、特定のフェルアインに限定した観察では、多くの場合、時と共に保守化や因習化をきたすが、並行して既存の社会への挑戦もまた起きる可能性を常に併せて持っている。それゆえ西洋の市民社会は、《失神状態と中性化》と同時に安堵させてもくれる結集と、社会に新しい切れ目を入れようとする結集とが絡み合う場である。それが日本の社会とどう異なるかを問う必要があるが、その課題のためにも先ずはそうした姿かたちに注目して西洋社会の実態に目を向けることがもとめられる。

[注]

- (1) Heinrich Schurz, *Altersklassen und Männerbünde: Eine Darstellung der Grundformen der Gesellschaft*. Berlin [Reimer] 1902.  
 (2) Johann Jakob Bachofen, *Das Mutterrecht. Eine Untersuchung über die Gynäokratie der alten Welt nach ihrer religiösen und rechtlichen Natur*. Stuttgart 1861. (邦訳) 岡道男・河上倫逸訳(監訳)『母権論 古

代世界の女性支配に関する研究 その宗教的および法的本質』三巻みすず書房一九九一—一九五

- (3) ウィーン学派への批判的な学史理解として次の拙訳を参照、レーオポルト・シュミット(著)河野(訳・解説)『オーストリア民俗学の歴史』(一九五二)名著出版一九九二、特に最後の二章を参照、第七章「ネオロマンティズムとナショナリズム」及び第八章「歴史性と事実性」：同じく次の学史研究の拙訳を参照、インゲボルク・ヴェーバー・ヘッラーマン/アンドレアス・C.ヒマー/ジークフリート・ベッカー(著)河野(訳)『ヨーロッパ・エスノロジーの形成—ドイツ民俗学史』(底本：第三版二〇〇三)文鏡堂二〇一〇、特に第四章第三節「ウィーン学派とスウェーデン学派—同時代の両極」
- (4) この箇所に注目した文献として次を参照、小林章夫『クラブ 十八世紀イギリス—政治の裏面史』(駁々堂一九八五)一九頁
- (5) Albrecht Lehmann, *Das Leben in einem Arbeiterdorf - Eine empirische Untersuchung über die Lebensverhältnisse von Arbeitern*. Stuttgart 1976, S.68.
- (6) Hans Lenk, *Materialien zur Soziologie des Sportvereins*. Ahrensburg 1972, S.74-76.
- (7) たむらけんすろ、ゲオルク・ヴェーリング (Hans-Georg Wehling 1938-2021) は、バーザン＝ヴェルテルムベルク州を中心に地方行政や《村の政治》について一九七〇年代から最近まで多くの論集を編んで来た。
- (8) 次の訳書の特に第四章「劇行事と音楽行事の諸形式」のキイワードに付した訳注を参照、ヘルマン・パウジンガー(著)河野(訳)『口承文藝の理論—あるち二〇二一—』
- (9) 邦訳では次を参照、マックス・ウェーバー(著)海老原明夫・中野敏雄(訳)『理解社会のカテゴリー』未来社一九九〇、特に第七章「マニフェスト」と『団体』、なお原著初出の書誌データを挙げる、Max Weber, *Über einige Kategorien der verstehenden Soziologie*. In: *Logos. Internationale Zeitschrift für Philosophie der Kultur*. 4Bd., 3Heft. Tübingen 1913.
- (10) 次の拙訳の当該箇所を参照、カール・ジーギスムント・クラマー(著)

市民社会の結社としてのクラブ・組合の過去と現在

- (11) 河野(訳)『法民俗学の輪郭』文鏡堂二〇二二、第八章「教会」
- (12) この歌は十九世紀の基本的な民謡収集に入っており、また南西ドイツでは歌唱クラブの定番でもある。原語は《Und die Rose und die Nelke / Müsset traurig verwelke. / Verwelke Batenka und Klei. / I han jo koi Schätzele meh》と、Batenka はカトリックサンタンナ (Schlüsselblume) のシユヴァーベン地方の言い方。参照、*Eth.Bohme, II, S.504.*

#### 【参考文献】

- ケーレリッヘーツィンガー一九七八「河野・訳」『クリステル・ケーレリッヘーツィンガー「コミュニティとクラブ・組合(フェルアイン)——民俗学のテーマをめぐる問題点と研究作業(一九七八)——」付「近代ドイツの地域社会における司祭・牧師と学校教師の立場(一九七八)」愛知大学国際コミュニケーション学会『文明二二』第四九号(二〇二二)一六九—二二二頁(原著) Christel Köhle-Hezinger, *Gemeinde und Verein. Überlegungen zur Problematik und Forschungspraxis eines volkskundlichen Themas*. In: *Rheinisches Jahrbuch für Volkskunde*, Jg.22 (1978), S.188-202; Christel Köhle-Hezinger, *Lokale Honoratioren. Zur Rolle von Pfarrer und Lehrer im Dorf*. In: Hans-Georg Wehling (Hg.), *Dorfpolitik. Fachwissenschaftliche Analysen und didaktischen Hilfen*. Opladen 1977, S.55-64.
- ジーヴェルト一九八四「河野・訳」『ハンス・イェルク・ジーヴェルト「ドイツ社会学の研究課題としてのフェルアイン(クラブ・組合)」(一)愛知大学国際問題研究所「紀要」第一五五号(二〇二〇年)』二八七—三二六頁、(二)同「紀要」第一五七号(二〇二一年)』二九一—三〇〇頁(原著) Hans-Jörg Stewert, *Zur Thematisierung des Vereinswesens in der deutschen Soziologie*. In: Otto Dann (Hg.), *Vereinswesen und bürgerliche Gesellschaft in Deutschland*. München [R. Oldenbourg] 1984 (Historische Zeitschrift, Beihefte, Neue Folge, hrsg. von Theodor Schieder, 9), S.151-180.

シユタウディングガー一九一三「ハンス・シユタイディングガー『文化組織としての結社に見る個体と共同体』 Hans Staudinger, *Individualium und Gemeinschaft in der Kulturorganisation des Vereins*. I. T.: Formen und Schichten, dargestellt am Werdengang der musikalisch-geselligen Organisation. 2. T.: Schichten und Welten heutiger Zeit. Jena [Diederichs] 1913.

ソール一九七四「ラルフ・ソール『ザェルトハイム』 自治体政治と権力構造』 Ralf Zoll (Hg.), *Kommunalpolitik und Machtstruktur*. München [Juventa] 1974.

ニッバーター一九七二「河野・訳」= トーマス・ニッバーター(著)河野(訳・解説)「十八世紀から十九世紀前半のドイツにおける社会構造としての組合」愛知大学国際コミュニケーション学会『文明二一』第四三〇号(二〇一九)一〇九一―一六六頁(原著) Thomas Nipperdey, *Verein als soziale Struktur in Deutschland im späten 18. und frühen 19. Jahrhundert*. In: Geschichtswissenschaft und Vereinswesen im 19. Jahrhundert. Beiträge zur Geschichte historischer Forschung in Deutschland, von Hartmut Boockmann, Arnold Esch, Hermann Heimpel, Thomas Nipperdey, Heinrich Schmidt. Göttingen 1972. S.1-44.

バウジンガー二〇〇〇「河野・訳」= クレメン・バウジンガー(著)河野・眞訳)『ドイツ人はどうやってドイツ的の国民性をめぐるステレオタイプ・イメージの虚実を因由』文藝誌二〇二二(原著) Hermann Bausinger, *Wie deutsch sind die Deutschen?* München [Beck] 2002.

バウジンガー二〇〇六= クレメン・バウジンガー『スポーツ文化』 Hermann Bausinger, *Sportkultur*. Tübingen [Attemp] 2006.

クントマン一九七四= Walter Henkels, *Deutschland deine Rheinländer. Da braust ein Ruf wie Donnerhall*. Hamburg [Hoffmann und Campe] 1974. S.161f.

ローサー一九四八= Robert Harry Lowie, *Social Organization*. New York [Holt, Rinehart and Winston] 1948.

綾部恒雄(監修・編)二〇〇五『結社の世界史』五巻 山川出版社

河野二〇一五『世間と社会』は『日本と西洋』を比較する基準だろうか。

(一)「愛知大学文学会『文学論叢』第一五一輯(平成二七「二〇一五年二月)三五―六八頁

河野二〇一八『世間』は日本社会の特異性か? ― 欧文の翻訳における『世間』の用例に即した検証』愛知大学人文社会学研究所『文学論叢』第一五五輯(二〇一八年三月)一五四―一二三頁

河野二〇一九「ドイツ語圏を例とした西洋社会の集団形成 ― ヘルマン・バウジンガーの日常研究に注目しつつ ―」『文学論叢』第一五六輯(平成三二「二〇一九)二月)一―三〇頁

河野二〇二二「西洋社会の日常的な集団形成の歴史像 ― 特に十九世紀前半のドイツ語圏における『組合の時代』について」『文学論叢』第一五八輯(令和三「二〇二二)二月)一―三九―六九頁

河野二〇二二「西洋市民社会と集団形成 ― ドイツ女性史から見たクラブ・組合 ―」『文学論叢』第一五九輯(令和四「二〇二二)三月)二五―五四頁

